

卒業生が編曲、学生らオーケストラ演奏

1曲のピアノ楽譜 若い力でよみがえるー

神戸女学院行進曲 93年ぶり復刻

神戸女学院大（西宮市）で長年眠っていた1曲のピアノ楽譜が、卒業生によって編曲され、93年ぶりに披露される。かつて卒業式で初演されて以来演奏の記録はなく、12日に同学院で行われる創立150周年の式典ではオーケストラ編成で復刻を遂げる。式典を目前に控え、演奏する学生らの音合わせに力がこもる。

（久保田麻依子）

12日、創立150周年式典で披露

曲は「神戸女学院卒業式 音楽家ヨーゼフ・ラスカがための行進曲」。1928年から7年間、同大で教壇に立ったオーストリアの音楽家ヨーゼフ・ラスカが手がけ、32年の卒業式で初演された。23年に来日したラスカは

宝塚音楽歌劇学校（現宝塚音楽学校）で指導し、宝塚交響楽団の創設にも携わった。



ヨーゼフ・ラスカ（神戸女学院大学図書館提供）

同大の音楽学部では、ラスカの「行進曲」など一部の楽譜を保管している。今回、式典に合わせてオーケストラとして復刻することになり、同学部を今春首

席で卒業した佐々比香莉さん(23)が編曲することが決まった。

佐々さんにとって、オーケストラという大規模な編曲は初めての試み。さらに「行進曲」の楽譜はピアノのみのため、パート別に20種類の楽譜を書いた。佐々さんは、原曲への忠実さを軸に「楽器の奏法や組み合わせを考えながら、それぞれが引き立つよう各パートの楽譜を起こした」と振り返る。式典で指揮を執る音楽学科の松浦修教授にアドバイスも受け、今夏完成させた。

9月末には、同大の学生や教員らで構成するオーケストラと初の音合わせがあった。終盤には、今も入学式などで演奏される「学院歌」の旋律が響き、オーケストラ演奏では珍しいパイプオルガンが、厳かな空気を際立たせる。松浦さんは「若い世代に、オーケストラ向けの編曲を任せるといった大きな挑戦を与えることができた」と話す。

「歴史の長い学校の、節目の一つとして感じられる演奏になれば」と佐々さん。式典のほか、12月2日に県立芸術文化センター（西宮市）で開かれる定期演奏会で披露される。



①記念演奏を前に入念に音合わせをする学生ら②編曲を手がけた卒業生の佐々比香莉さん(右)と、指揮を執る松浦修教授③いずれも西宮市岡田山、神戸女学院大